5万トン時代へ

青森リンゴ輸出

45

中国と香港の今後

安全・安心 需要高まる

中国と香港は青森リンゴにとっては、古くから付き合いのある市場だ。1910（明治43）年には上海に本県の輸出商店が設立されており、それを皮切りに、第2次世界大戦の途中まで断続的に中国向けリンゴ輸出が行われていた。

戦後は、49（昭和24）年に香港向けが再開し、61（同36）年には「青森駐在所」が香港に設置され、そこを拠点にアジア地域向けのリンゴ輸出が行われていた。

中国向けのリンゴ輸出再開は、2003年産からで、中国のWTO（世界貿易機関）加盟に伴い、青果物では「リンゴ」と「ナシ」だけが認められた。解禁当初年はわずかに11トン輸出されただけで、その後も100トンから400トンの範囲内で推移していた。

中国に輸出するためには、小売りの参入から始める必要があり、高額な入場料を払ってテナントにならなければならないなど商習慣の違いで、なかなか卸売業を相手にできなかったようだ。

県りんご対策協議会が香港で初めて行った販売促進キャンペーン＝2016年11月（同協議会提供）

14年産が672トン、15年産が1622トンと中国向け輸出量がここにきて増加し始めている。一つには台湾系の貿易業者が中国にある系列会社を使って本県産を扱い始めたことが要因に挙げられる。

また、中国は世界最大のリンゴ生産国だが、富裕層は安全・安心なリンゴならいくら高くても購入するという。中国の爆買いパワーに期待したい。

香港については、13年産から倍々のペースで輸出が増加している。15年産は6713トンで日本リンゴ輸出量の19％を占めるまで増加した。主に日系のスーパーでの取り扱いだが、旧正月の贈答用の世界一、陸奥、ふじの大玉のほか、通常期は香港では珍しい黄色の王林、トキなどに人気がある。

香港には、中国産の安価なふじが出回っているが、安全・安心な観点から、円安などで値ごろ感が出ている日本産を買い求める動きが出ているようだ。

香港では「A・S・Watosonsグループ」と「Dairy Farmグループ」の二大グループがスーパーマーケットの7割を展開している。青森リンゴはグループ内の高級スーパー数店舗だけの販売にとどまっているため、今後、これらのグループでの取り扱いが実現すれば、まだまだ香港向けが拡大する可能性がある。

（県りんご輸出協会事務局長　深澤守）